

# すきなみの街と自然

人と自然との出あいを大切に

第129号

H30.1月

杉並区  
環境部環境課  
環境活動推進係

## 杉並区で見られる外来性のクモ

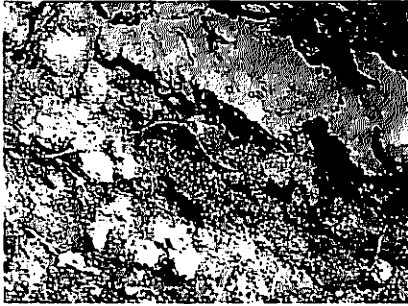
杉並区の自然環境調査は1985年（昭和60年）にスタートし、現在第6次調査まで行われ全国でも屈指の詳細な報告書が発行されております。来年度（平成30年度）に第7次調査が実施されるにあたり、杉並区内で見ついている外来種あるいは外来種と考えられるクモについてまとめて見ました。第6次調査では第1次から第5次調査までの間、まったく見つからなかったマダラヒメグモが、また第4次、第5次調査ではシロホシヒメグモなどの外来種が見ついています。これらのクモは1980年～1990年代にかけてコンテナや輸入品に着いて、港湾施設から日本に上陸したいわゆる外来種と呼ばれる種類で、有名なセアカゴケグモやハイイロゴケグモ（この2種は今のところ杉並区では見つかりません）よりも先に上陸していた種類です。近年の調査で見つかったことから、杉並区内にも外来種の波が近づいてきていることが感じられます。

ところで、外来種といえば、主に明治以降、人の生活環境の多様化や経済活動を通じて人為的に侵入した（あるいは輸入したものが野生化）生物を指しているのですが、クモの中には明治以前の江戸時代、戦国・室町時代あるいはそれ以前に日本に侵入したと思われる種類があります。たとえばユウレイグモ科のシモングモやイエユウレイグモ、ヤマシログモ科のユカタヤマシログモ、徘徊性の種類では日本最大のアシダカグモなどの屋内性の種類は、生活道具や衣類、装飾品、武具、書物など、さまざまな荷物に着いて日本に入ってきたものと思われます。これらのクモの多くはその後分布域を広げ、本州、四国、九州の各地（一部北海道にも分布）で見ることができるようになりましたが、不思議なことにその分散のスピードは種類によって異なります。最も早かったのは1982年に愛知県で発見されたマダラヒメグモで、わずか26年で青森県まで分布域を広げています。最も遅いクモは1597年に加藤清正の荷物に付いて朝鮮から京都に入ったと言われているヒトエグモで、2017年の今日まで420年かかっても隣の大阪府と奈良県にしか分布域は広がっていません。次の第7次調査では前述のマダラヒメグモがどのくらい分布域を広げているかが注目されます。

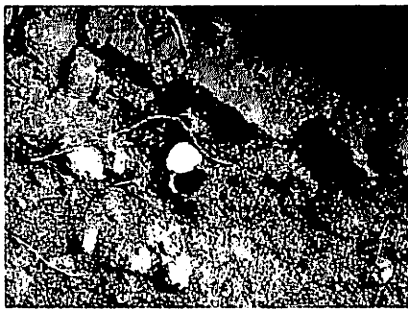
今回は杉並区内で見ついている近年の外来種と、明治以前に日本に侵入した外来種（帰化種も含む）について紹介します。なお、次ページから紹介するクモは、日本の生態系に影響を及ぼすため駆除の対象となる「特定外来生物」の対象ではありません。いずれの種類もハエやカ、ゴキブリ、ダニなどの害虫を補食している有益動物です。



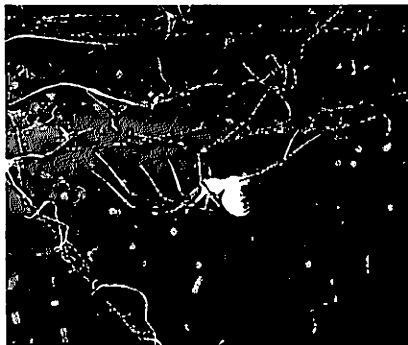
キシノウエトタテグモ♀



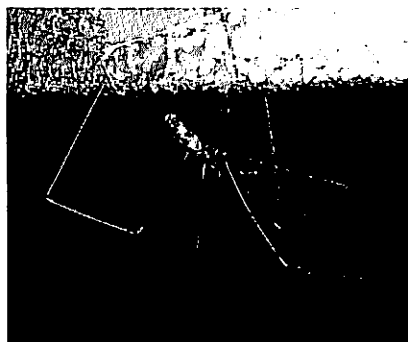
キシノウエトタテグモ住居  
扉が閉まっている



キシノウエトタテグモ住居  
扉が開いている



シモングモ♀



イエユウレイグモ♀

### ■キシノウエトタテグモ (トタテグモ科) (環境省レッドデータ準絶滅危惧種)

1913年(大正2年)に東京大学構内にて岸上鎌吉により採集された標本を基に新種として発表された。東京、横浜、名古屋、京都、大阪などの大都市圏と鹿児島市に集中して見られ、他県ではあまり見られない。城郭、神社、寺院、人家の庭先、土台のきわ、公園の植え込みのふちなどの地面に穴を掘り、入口に扉を付ける。沖縄県に生息するオキナワトタテグモときわめてよく似ており、沖縄県のクモ研究者下謝名松栄氏は、本種はオキナワトタテグモの亜種との見解を示している。生息場所が人為的環境に限られていることから以前より移入種と考えられており、特に鹿児島、京都、東京は個体数が多く、これらをつなぐルートが目されていた。おそらく本種のルーツは沖縄県であり、薩摩藩による琉球併合以来、薩摩に送られてきた様々な資材(特に草木、石や土)の中にオキナワトタテグモが混じっていたものと推測される。そのクモが鹿児島県で増え、その後、薩摩から京都や江戸の藩邸に送られた樹木の根に付いて運ばれ、京都府内、江戸府内に分布域を広げていったと考えられる。オキナワトタテグモとキシノウエトタテグモは形態的にはきわめてよく似ているが、両種の住居の扉には大きな違いが見られる。オキナワトタテグモの扉は厚く厳重になっており、なかなか開けることができないが、キシノウエトタテグモの扉は薄くすぐ開けることができる。おそらく鹿児島上陸以来400年の間に、強力な天敵のいない場所のトタテグモの扉は徐々に薄くなり、今日のような違いが生じたものと思われる。

本種は外来種では無いが、特異な侵入経路を辿っていることから特に紹介しておきたい。

### ■シモングモ (ユウレイグモ科)

体長2~3ミリの小型種で全体白色。本州、四国、九州に広く生息し、人家、倉庫、神社、寺院などの屋内外に普通に見られる。室内の壁の隅、書棚の奥、ソファの下、靴箱の隅、押し入れの中などに不規則網を張る。屋外でも積み荷の間、側溝などに見られる。中国にも広く分布しており、7~8世紀にかけての遣隋使、遣唐使の時代に荷物にまぎれて渡来してきた種類と思われる。杉並区内では全域に分布している。

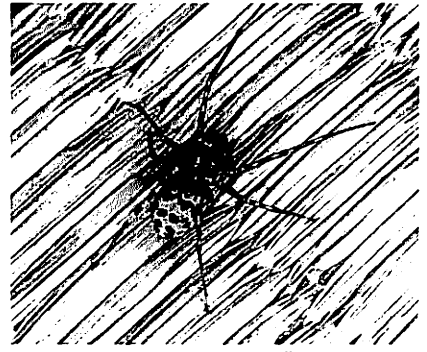
### ■イエユウレイグモ (ユウレイグモ科)

体長8~10ミリ。屋内性のクモとしてはアシダカグモに次ぐ大型種。人家、倉庫、神社、寺院、学校などの屋内の暗い場所に生息している。天井付近、棚や家具の隙間、洗面台の下部、などにシート網に近い大型の不規則網を張る。危険を感じると体を激

しくゆらして相手を驚かす。前種同様、遣随使、遣唐使の時代に渡来してきたと思われる。杉並区内では全域に分布している。

### ■ユカタヤマシログモ (ヤマシログモ科)

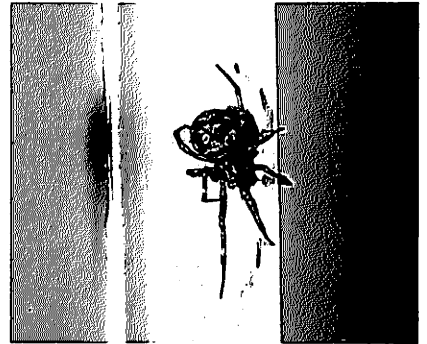
体長5～7ミリ。人家、神社、寺院、倉庫などの天井の隅、家具や書棚の奥、壁や柱の隙間などにひそむ。網を張ることは無く、夜間活動して小さな昆虫やクモなどを、上顎にある粘液射出孔から粘液を投網上に吐きかけて捕らえる。全国に分布するが個体数は少ない。杉並区内でも全域に生息するが個体数はきわめて少ない。シモングモ、イエユウレイグモ同様、遣随使、遣唐使の時代に渡来してきたと思われる。



ユカタヤマシログモ♀

### ■マダラヒメグモ (ヒメグモ科)

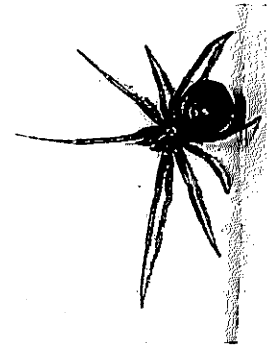
体長 3.5～6.5 ミリ。1982年2月に名古屋港で発見された外来種。物流のトラックによって荷物と共に運ばれ、東名、関越、長野、北陸の各自動車道のパーキングエリア、主要国道、地方道周辺の多くの施設を拠点に全国に分布が広がっている。2008年には青森県に達しており、外来種としての拡散のスピードは最も速い。人家の中や周辺、側溝の中などに不規則網を張る。杉並区内では荻窪八幡で採集されている。



マダラヒメグモ♀

### ■シロホシヒメグモ (ヒメグモ科)

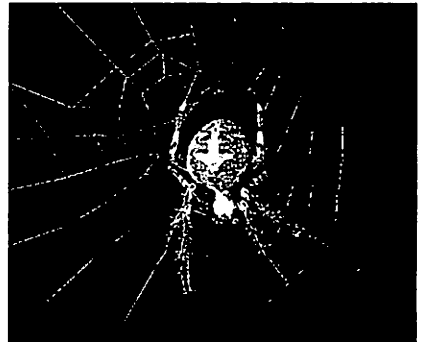
体長7～11ミリ。黒色の地に白色の星斑が目立つが、全体黒色の個体もありゴケグモ類とよく間違えられる。海岸付近に多く生息する。港湾施設、マンション、ホールなど集会施設、倉庫などの暗い場所、側溝の中などに不規則網を張る。近年、内陸部への侵入が見られ、住宅地でもよく採集される。本種は1950年代に一度国内に侵入しているが、一度途絶え、1980年代に再び侵入したと思われる。杉並区内では今川から採集されている。



シロホシヒメグモ♀

### ■イエオニグモ (コガネグモ科)

体長8～12ミリ。人家の軒下に見られる大型、黒色のオニグモ(体長20～30ミリ)ほど大きくない、体色もほぼ灰色。昔は商店の店頭が多かったが、近年はほとんど見られない。人家の軒下、駅舎の窓やホームの蛍光灯の回り、コンビニエンスストア、ファミリーレストランなどの看板の周囲、街路灯の回りなどに垂直円網を張る。北海道以外の全国に分布。江戸時代の文献で店の前のクモに困ったとの記述がないので、おそらく江戸時代後期、長崎の出島に到着する船から上陸したものと思われる。杉並区内では和田堀公園と大宮八幡で採集されている。



イエオニグモ♀



アシダカグモ♀

### ■アシダカグモ (アシダカグモ科)

体長 20～32 ミリ。徘徊性のクモでは日本最大の大型種。人家、神社、寺院、蔵などの天井や壁の隅、家具や食器棚の裏側、物陰に潜む。夜間活動し天井付近、壁、襖など、また屋外でも縁の下、塀、石垣などで脚を広げて静止し、近くに来るゴキブリ、ハエ、カ、コオロギなどを捕らえる。1549 年以降、ポルトガルの宣教師の荷物と共に侵入したと思われる。分布域は千葉県以南の太平洋側各県、福井県以南の日本海側各県で内陸への侵入、温暖化による北上もほとんど見られない。本種の分布境界線を感じることでできる面白い話として、神奈川県民の多くはアシダカグモを知っているが、東京都民はほとんど知らないという顕著な例がある。杉並区内では 1 回採集されている。



アダソンハエトリ♀



アダソンハエトリ♂



イトグモ♀

### ■アダソンハエトリ (ハエトリグモ科)

体長 6～9 ミリ。屋内性の徘徊性種。人家の壁や周囲の塀、マンションの非常階段などを歩き回ってハエ、カ、ガ、ゴキブリの幼虫などの害虫を捕食する。雌は褐色の頭胸部に茶色の腹部が目立った特徴は無いが、雄は頭胸部後方と腹部前方に白色の縁取りがあり、特に腹部後方の 1 対の白点と、目の前で良く動かしている触肢の白色毛が良く目立つ。温暖化により北上しており、それまで屋内にいたミスジハエトリを追い出して住み着く。従来アシダカグモ同様、1549 年以降、宣教師と共に渡来してきたと思われていたが、大阪から東京までの分布速度 (約 35 年) から逆算すると渡来時期はもっと遅く、江戸時代後期頃、長崎の出島に渡来し各地に進出していったのではないかと考えられる。杉並区内では第 6 次調査で善福寺公園、観泉寺、荻窪八幡、大宮八幡、塚山公園、龍光寺で見つかった。

### ■イトグモ (イトグモ科)

体長 6～9 ミリ。杉並区内では発見されていないが生息している可能性が高い希少種。古い建物の内外に生息。学校、旧家、神社、寺院、蔵などの暗い場所を好み、クモの周囲に薄い網を張っているが分からないことが多い。ゴキブリの幼虫、ハエ、カなどの害虫を捕らえる。採集場所は学校 (主に大学) と旧家に多く、夜行性のため人目につかないことから採集例が少ないと考えられる。家具の裏、書棚、机の中、壁や柱の割れ目などにひそむ。本種は旧帝国大学の構内からの採集例が多いという特異な生息状況を示すことから、明治初頭、お雇い外国人として来日したどこかの国の教師の荷物に付いて渡来したのではないかと考えている。杉並区内からは採集されていないが、生息している可能性は多分にあるので、発見した場合は、杉並区環境課環境活動推進係までご連絡いただきたい。

(文・写真 新海 栄一)

#### 問合せ先

杉並区環境部環境課環境活動推進係

電話：3312-2111 (内線3704)

FAX：3312-2316